

特別支援教育実践研究会第6回実践研究発表会 発表要旨

開催日時：平成29年11月11日（土）15：15～17：00

（第1グループ発表時間…15：30～16：15）

（第2グループ発表時間…16：15～17：00）

於：上越教育大学特別支援教育実践研究センター

【発表1】

リズム運動のための組曲「おさんぽランラン」

齋藤一雄（聖学院大学）

知的障害児がイメージしやすいリズムや動きは、歩く・走る・跳ねるリズム、動物や乗り物の動き、行事などと結びつけた活動である（齋藤・齋藤，1997）。また、長谷川（2008）は、知的障害児を対象にしたリズム運動で使用する音楽と動きは、動きを引き出しやすいリズムやテンポ、動きのイメージと音楽のイメージが結びつきやすいことなどを考慮点としてあげている。そこで、リズム運動のための組曲として、みんなでお散歩に行きながら、見たり、乗ったり、動物になってみたりする「おさんぽランラン」を構成した。内容は、「おさんぽランラン」（歩行）、「何かな？」（ぬき足さし足）、「子犬のさんぽ」（歩く・吠える）、「ツバメ」（走）、「シマウマ」（ギャロップ）などである。そして、表情豊かにリズムにのって動くこと、テンポ、リズム、拍の長さ、強弱、休止などを聞き取って動作化すること、いろいろな動きをイメージして動作することを目標とした。

【発表2】

PDD・知的障害児の集団随伴性による仲間への働きかけ

熊南真人・村中智彦（上越教育大学）

特別支援学校小学部1～3年のPDD・知的障害児4名と定型発達児3名を対象に、玉入れとカード釣りゲームの活動場面において、個人随伴性と集団随伴性を適用した。集団随伴性による仲間同士の相互交渉促進について、仲間への自発的な働きかけの「反応型」「機能」から検討した。

【発表3】

小学校移行期における母親の育児態度に育児感情と共感性が及ぼす影響

—療育教室に通う年長児の母親を対象に—

高橋靖子（愛知教育大学）・村中智彦（上越教育大学）・木野和代（宮城学院女子大学）

早期療育教室に通う年長児を持つ母親を対象に、「小学校への移行期における子育て感情尺度」を作成し、母親の育児感情、共感性、知覚されたソーシャル・サポート、そして子どもの行動特徴が育児態度に及ぼす影響を検討する。本研究は、JSPS 科研費（課題番号：JP26380922）の助成を受け、実施されている。日本LD学会第26回大会（2017年10月、栃木）で発表した内容の一部である。本研究会では、分担者の一人である村中より発表を行う。

【発表4】

書字を苦手とする児童への支援方法について（3）

井上和紀（新潟県新潟市立中野山小学校）・大庭重治（上越教育大学）

・石田脩介（兵庫教育大学大学院博士課程）

書字を苦手とする小学4年生の児童に対し、漢字を書くことを通してその苦手意識を払拭させようとする試みである。昨年度、漢字を部首やつくりの色分けしてなぞらせたところ書く意欲を持ち始め、漢字スキル1ページあたりにかかる時間が短くなった。しかし、想起することに苦手意識をもち続けた。今回、部首やつくりについて、その名前と意味を教えるところから始めた。また、漢字を想起させる場面をつくり、何も見ないで書く、漢字テストを行った。漢字テストを行うにあたり漢字練習のためのワークシートを用意した。これはテストする漢字を例示し、色を薄くしたなぞるための文字を示したものである。これを用いて部首やつくりを思い出させる声かけをしたところ、それを手がかりに思い出して書こうとする姿が見られるようになった。漢字テストの結果が向上し、苦手意識が小さくなりつつある。

【発表5】

特別支援学級における児童間のかかわりを促すための支援手立てに関する実践的研究

石田脩介（兵庫教育大学大学院博士課程）・大庭重治（上越教育大学）

・井上和紀（新潟県新潟市立中野山小学校）

これまで小集団学習場面において、情報統合型及び意見集約型課題を用いて、特別な教育的ニーズのある児童のかかわりを促す活動を行ってきた。本研究では、特別支援学級における情報統合型「いろいろトレジャー」及び意見集約型課題「すごろくえすと」の紹介と活用事例を報告する。「いろいろトレジャー」は、何色の宝箱にどの宝が入るのかを情報カードを用いて相談しながら推論するという課題であった。一方、「すごろくえすと」は、情報カードを用いて相談しながらすごろくで動かすコマである勇者の能力を決めるという課題であった。情報統合型課題及び意見集約型課題を用いることで、意見を主張できなかった児童が発言するようになるとともに、自分の意見を主張するだけでなく、他者の意見を尊重しようとする姿勢が見られるようになった。

【発表6】

小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の他者との

係わりの変化を促すための支援課題（その4）

石田脩介（兵庫教育大学大学院博士課程）・金子孝史・山下拓也・佐脇由佳子

・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

特別な教育的ニーズのある児童の他者とのかかわりの変化を促す支援課題には、情報統合型課題と意見集約型課題双方の利点を活かす工夫をしていく必要がある。本研究では、このようなねらいをもって独自に開発したすごろく課題「すごろくえすと」の紹介と課題理解を観点とした活用結果を示す。本課題は、すごろくで動かすコマである勇者の能力を情報カードを手掛りにして相談しながら決定する活動が含まれていた。第一回目においては、あらかじめ能力が決められた勇者を用意し、自分たちが選んだ勇者が実際にすごろくに挑戦するとどう動くのかを体験した。第二回目からは自分たちで相談して能力を決める活動を組み込んだが、まだ理解が十分でない児童が見られたため、第三回目から情報カードを改善した。回を重ねるごとに積極的に発言する児童が増えるとともに、上級生たちが下級生に配慮する様子が見られるようになるなど、かかわりの変化が促された。

【発表7】

知的障害者の実行機能特性に基づいた作業活動の生産性を高める支援方法

山下拓也・佐脇由佳子・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

一般に、作業活動の生産性が高まることで、働く意欲が醸成されるが、知的障害者は作業の正確性を欠くこと多くあり、生産性の高い作業活動が難しい。その要因の一つとして実行機能の特性があると考えられ、例えば問題解決に際して自ら計画を立てることや、エラーの検出や修正が困難であることが予想される。本研究の対象者は知的障害のある高等部男子生徒であり、これまでの作業活動では、「速く」作業をしようとする姿は見られるものの、「正確に」作業を行うことができず、また不正確さ（エラー）を指摘されてもこれを修正することができなかった。本発表では、対象者の自立的で生産性の高い作業活動を促すことを目的として、実行期特性の観点から考案した支援方法を紹介し、これまでに行った実践から得られた結果からその効果を考察する。

【発表8】

知的障害を伴うASD児の遊びの中の発達支援

笹川美智・神喰由紀子・庄司智美・池田吉史（上越教育大学）

特別支援学校小学部に在籍する知的障害を伴うASD児2名を対象として取り組んでいる遊び活動を通じた発達支援について実践報告を行う。本実践では、遊び活動は「うごきで遊ぶ」、「どうぐで遊ぶ」、「えらんで遊ぶ」の3つから構成され、遊び活動を通して対象児が①模倣をしながら自発的に活動に取り組む、②コミュニケーションを図りながら協力して活動に取り組む、③活動と絵カードのマッチングを学習するという3つの行動の形成あるいは増加を目標としている。本発表では、発達支援のこれまでの成果と今後の課題を整理することを目的とする。

【発表9】

特別な教育的支援を必要とする児童の授業スキル向上を促す取り組み

高井透・笹川美智・下田宏・池田吉史（上越教育大学）

特別な支援を必要とする児童生徒の問題行動が、学校の集団場面で大きな問題となっている。しかし表面的な叱責や集団からの切り離しといった対応では、児童のQOLを低下させ、二次的な障害をもたらしかねない。児童の問題行動の背景にある、授業で必要な行動やスキルの不足といった本質的な部分に対する対応が必要である。そこで本臨床では、「課題に集中して取り組む態度」、「他者との適切なかかわり方」の2つのスキルにシフトし、それらを楽しみながら身につけることのできる場面を意図的に設定し、児童のスキルを育成していくことを目的とする。

【発表10】

Animal Size Testの干渉効果とADHD特性との関連

池田吉史（上越教育大学）

抑制制御は、課題に無関連な情報を抑える能力であり、実行機能の重要な要素の一つである。アセスメントの一つにAnimal Size Testがある。これは、動物の実物の大きさと絵の大きさとが不一致な刺激（例えば小さいゾウ、大きいカエル）を呈示して、実物の大きさや絵の大きさを回答する課題である。本研究では、定型発達成人を対象としてAnimal Size Testにおける干渉効果とADHD特性との関連について検討した。その結果、絵の大きさを回答する課題の干渉効果とADHD特性との間に有意な相関関係が示された。